ぶらっと下半田　　2007.11.17

日本初の「軒下アーケード」
新美南吉が通った喫茶店が残る

11 月 17 日第四回半田ふるさと散歩に妻とともに参加した、今回は JR 半田駅と運河の間の下半田の街並を歩いた。この地区は明治の時代に活躍した、中埜家や小栗家などの豪商の屋敷が集まっている所だ。今は運河と蔵の街として知られ、ミツカンの本社があることでも知られている。

昔は牧場だった JR 半田駅

東浦を 8.23”の電車に乗り半田駅に下りると、オレンジ色のジャンパー姿のボランティアの方たちが受付をしていた。受付を済ませると先輩の杉江さんがこられて少しおしゃべりをした、8.50”頃になるとおよそ 40 人ほどの人が集まっていた。

酪農発祥の地の説明碑と現在の半田駅

五つの班に分かれてスタートすることになり、私と妻は新美さんのグループになった。9.00”にスタートして最初に新美さんが説明してくれたのは、この半田駅周辺は昔牧場だったという。
駅を降りた右手にはそのことを説明する碑と牛の像がある、それによると明治 14 年頃四代目中埜又左衛門が、健康のために自家用に乳牛を飼育した。その後牛乳を飲む人も増えて明治 17 年営業を始めた。明治 19 年に武豊線の半田停車場が出来たので牧場は柊町に移転した。昭和 12 年に知多牛乳設立、昭和 56 年にみどり牛乳に改められた。そして、平成 4 年には知多酪農発祥 100 年の記念すべき日を迎えている。新美さんの説明では単位面積あたりの牛の数は日本一だという。そして、今も街の東西の交通を遮断している、駅西の低いガードの横には猿渡川が流れて、大きく駅前の方向に蛇行している。昔はこの地点で川が氾濫したことから真っ直ぐ流れるバイパスを掘った。これが新川である、が、このいずれも今は地下の暗渠になっていて川のあることは分からない。

文学者「小栗風葉」や「新美南吉」ゆかりの地

喫茶店「カガシヤ」

小栗風葉の碑

半田駅から本町通へ向かう途中に山之神社があり、下半田にはもう一つ業葉神社がある。そして本町通へ出ると、新美南吉が通ったコーヒー店「カガシヤ」が今も営業している。もちろんコーヒーの味は当時とは違うだろうが、一度ゆっくり訪れてみたいものと思った。それにしても、南吉はコーヒー店

へ通っていたとはなかなかハイカラだったということか。南吉の作品を多く知るわけでもないが、近郷の青年だった南吉の魅力に心惹かれる思いだ。
　このカガシヤから少し離れた所に小説家「小栗風葉」生誕の石碑がある。小栗風葉は金色夜叉を最後に完成させた人物だという。つまり金色夜叉は尾崎紅葉が書いたものだが実際には未完で終わり、完成させたのが小栗風葉なのだ。彼は美濃半薬局の長男として生まれたが、跡をとらずに文学の道へ進んだ。当時の文壇に君臨していたのは尾崎紅葉で、彼の激励を受けて小説家になる決意を固めました。
そのため廃嫡分家の処置が下されましたが、紅葉の門下に加わり文筆に精進したのです。そして、代表作「青春」は島村抱月の絶賛をうけたのです。
したがって当時としては親不孝者だったわけで、その美濃半さんの店には小栗風葉の写真や作品がいくつかケースの中に展示されていました。

日本初のアーケードを造った片山市三

　この本町通を北へ進むと軒下アーケードが続いている。これは現在の片山人形店の主だった初代片山市三が中心になって造り上げたもので、日本で最初の軒下アーケードだという。これは個人が造った物なので、アーケードの上は住み家になっているのが特徴で、中には飾りのついたものもある。以前、青森県黒石市で見た雁木の道と同じだが、雪国ではない半田で造ったのが味噌か!!この片山市三は鋳物で財を成した、今の赤レンガの所に工場があった。有名なものとしてはお伊勢さんの橋のギボシを作った、さらには知多半島の先端師崎に大砲を造ったときには大砲の弾を造ったという。しかし、西郷隆盛から多くの注文を受けて造った品物の代金が、西郷が戦に負けたことから回収できずに倒産してしまった。
　その片山家は人形店として 83 歳の 15 代当主が健在で、明治のころの街の地図を広げて当時の説明をしてくれた。その地図も片山さんの記憶から、ボランティアの新美さんが作成したものと言う。お年寄りが元気なうちに昔のことを記録することはとても有意義なことと思う。

軒下アーケード

83 歳の 15 代片山市三さん

愛知県で一番栄えた半田

　このあと元半田役場だった商工会議所の前へでる、ここには道路元標がありその交差点の向かいには、当時から営業しているお菓子屋さんの「丸初」がある。なかなか大きな店で、当時の一等地にあったお菓子屋さんである。そこからさらに北へ向かうと北区区民館がある。この区民館は元の郡役所で、知多半島中から多くの人が集まった。そのために、近くには木造 3 階建ての旅館があったという。

　ここから南へ戻ってくると本屋の同盟書林がある、この本屋は知多半島一の大きな本屋さんだった。学校の教科書も一手に引き受けていた店だ。私たちも子供の頃から耳にした名前である。ここで新美さんの話では、明治 10 年頃の愛知県下の、土地の値段が一番高かったのは名古屋ではなくて亀崎だったという。それくらい半田地域は栄えていたのだ、しかし、今ではそれほどの勢いはなくちょっぴり残念なことだ。

半田繁栄の基礎を創った中埜家と小栗家

　酒の文化館で小休憩、その隣には中埜半六邸がある。建物が少し傷んできており少しずつ修復の手が入れられているようだ。中埜一族の本家は中埜半左衛門家である。四代目半左衛門の兄が分家して、初代中埜半六となった。

この中埜半六は酒造業.海運業や土木業などを支配する大商人となり、本家をしのぐ大富豪になった。

江戸時代にそれぞれの土地の資産家を歌った文句で「半田半六、緒川じゃ源左、鳴海下の町千代倉よ」とうたわれるほどであった。源左とは東浦町緒川の塚本源左衛門で、当時は半田より緒川が栄えていたのだ。鳴海の千代倉家は自分の土地を通るだけでお伊勢参りができたといわれた。

明治 22 年に建てられた当時は母屋.本宅.九つの蔵など 300 坪に及ぶ豪邸だった。これは翌年に陸海軍の大演習を控えて、ぜひとも明治天皇に泊まっていただこうとして建てたものといわれている。他にも亀崎の富豪.井口半兵衛も同じように豪邸を建て、明治天皇をお迎えしようとしたが、明治天皇は小栗家に泊まられてくやしんだというエピソードが残っている。

この母屋は戦後使われなくなり、料亭や相撲部屋にも貸し出された。大相撲では横綱大鵬のいた二所ノ関部屋がここに泊まり、隣の業葉神社に土俵をしつらえて稽古に励んだという。しかし、長い間廃屋となって広い庭も荒れ果てていた。現在は「半六倶楽部」ができ、少しずつ修復を行っているという。

この半六邸の少し南に万三商店の小栗邸がある。ミツカンの「酢の里」と「酒の博物館」を結ぶ狭い道に面して建っている。万三商店本宅.店舗の建物で、今は半田市観光協会の事務所にもなっている。この建物は平成 16 年に国の重要文化財の指定を受けています。友の書いた半田十話物語にはつぎのように説明されています。

万三商店の小栗邸

万三商店とは下半田に江戸時代初めから支配していた小栗一族の一家で、酒造業をしていましたが、灘の酒に負けて知多の酒の売れ行きが不振になったことから、肥料商として活躍しはじめました。明治になって北海道のニシン.大豆も仕入れるようになり、そのため明治7年には味噌.醤油も始めました。「生引き溜まり」は明治24年の国内博覧会で金賞を得て、宮内庁ご用達にもなりました。それよりも、肥料商として明治半ばから大正時代にかけて、ほとんど独占的に商売が出来て中部はもとより、近畿.関東.東北にまで幅広く商いをしました。

さらに化学肥料が発明されても高価なため、今までの有機肥料と混ぜて安価に販売して大繁盛しました。この万三商店の前の道路が、江戸時代から明治前半にかけての知多半島一の賑わいをみせたメインストリートだったのです。今の本町通りが出来る前は、この道路の両側に大豪商の家や事務所.蔵が連立していたのです。明治天皇も愛馬「金華山」に乗ってこの道を通りました。

このあと運河沿いを歩き、JR半田駅前に戻りました。2時間ほどの散策は6.700歩で心地よい疲れでした。